

笹川保健財団 奨学金支援

助成番号：2018-

2019年 5月 30日

公益財団法人 笹川保健財団

会長 喜多悦子 殿

2018年度奨学金支援

完了報告書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

進学先 Rollins School of Public Health, Emory University

氏名 時枝 夏子

2019年5月30日

Rollins School of Public Health, Emory University

Master of Public Health 修了

時枝 夏子

笹川保健財団 奨学金支援

完了報告書

1. はじめに

貴財団の奨学金にご支援を頂き、エモリー大学ロリンス公衆衛生大学院の公衆衛生修士課程を修了いたしましたことを、ここにご報告申し上げます。

本学は、米国疾病管理予防センター（以下、CDC）やカーターセンター、CAREなどの公衆衛生に関わる機関が拠点を置く、米国ジョージア州アトランタにあり、6つの学部で構成されている（行動科学・健康教育、生物統計、環境保健、疫学、保健政策・管理、国際保健）。本学はエモリー大学内の医学部や看護学部との連携が強固であり、アルツハイマー病、HIV/AIDS、心臓血管系の病気、悪性新生物、周産期に関連した問題と多岐にわたって共同研究を行なっている。また本学の300以上いる教員の半数以上は隣接するCDCから派遣された非常勤講師で構成されている。カーターセンターは学生に多くの国際保健現場での実習の機会を提供し、アメリカ癌協会やCAREも共同研究活動を行なう機会を提供している。このように、本学は公衆衛生の分野で世界を牽引する団体と共同して、国内外で研究また実践的な活動を行う機会に恵まれた環境にある。

本公衆衛生修士課程は2年間で、疫学と生物統計を重点必須科目として履修し、その他母子保健や感染症、慢性疾患、水質衛生や保健政策など幅広い選択科目から自身の興味に沿って履修を行うことができる。さらに、学業と合わせて現場での経験を積むことを推奨しており、上記に挙げた機関や大学内（医学部や看護学部を含む）でリサーチアシスタント等の機会を積極的に学生に提供している。また修了要件に200時間の臨地実習と修士論文の提出を定めている。

2. 履修科目について

本学は42単位の科目履修を卒業要件としていた。私は、公衆衛生学部のGlobal Healthを専攻し、卒業要件に沿って必要科目を履修した。Global Healthは4つの専門分野を選択することができ、私はCommunity Health and Developmentを選択した。本専攻のコンピテンシーは以下の通りである¹。

- Evaluate health needs and assets of communities to promote social justice or social and behavioral change

- Explain strategies for partnering with local, national and international organizations in health and development
- Develop frameworks and approaches to monitor and evaluate program goals, objectives, targets or operations
- Apply the tools of financial management in public, nonprofit organizations, and community organizations
- Assess management challenges in public, nonprofit organizations and community organizations

履修科目は、専攻と専門分野ごとに必須科目が設定されており、それ以外は学部内のどの選択科目も履修でき、ビジネススクールや看護学部の授業も選択し単位互換を行うことができた。私は、1年次に疫学と生物統計の必須科目、また調査手法や質的研究等の臨地実習に活用する科目を受講して、2018年夏季にラオスの世界保健機関（WHO）事務所で200時間の実習を行った。1年次を通して、アジア地域における慢性疾患対策の課題と対応に関心を持ったため、ラオスでその対策が効果的に進んでいない原因を明らかにするために調査を行った。実習を終えてアメリカに戻り、2年次に臨んだ。1年次と本臨地実習を経て、公衆衛生の現場で、研究によって導き出されたエビデンスを活用しながら実践を行っていく上で、以下のスキルが有用であると考えた。

- Biostatistics - Survival Analysis
- Epidemiology - Systematic Review & Meta-Analysis
- Research skill - Mix Method using a software (MAXQDA)
- Management Skill - Monitoring & Evaluation
- Specialized knowledge - Chronic Disease Prevention and Control

そこで、2年次前期は上記の科目を重点的に履修し、2年次後期は Monitoring & Evaluation と Chronic Disease Prevention and Control を履修し、併せて、修士論文の作成、CDCでのインターンシップを行なった。

3. 臨地実習について

1) 概要

本学は200時間の臨地実習を行うことを卒業の要件としている。そこで、夏期休暇を利用して、ラオスのWHO事務所で3ヶ月間のインターンを行った。業務内容は、医療施設における心疾患患者に対するサービス提供の現状を明らかにするというものであった。

2) 背景

ラオスはタイ、ミャンマー、中国、ベトナム、カンボジアに囲まれた内陸国である。近年は感染症や母子保健分野での課題と同様に、非感染性疾患（Noncommunicable Diseases: NCDs）による健康被害も顕在化してきている。2017年の報告によると、全体の死者数の55%

はNCDsによるもので、その中でも心疾患の割合が最大となっている²。世界的なNCDsの広がりに対して、WHOは2013年にWHO Package of Essential Noncommunicable Disease Interventions for primary healthcare in low-resource settings (WHO-PEN) ガイドラインを発表した。これは、心疾患、慢性呼吸器疾患、癌、糖尿病の4大疾患に対して、プライマリーヘルケアで必須となるサービス提供のプロトコルを定めたものである³。2015年には、ラオスでもLao-PENと名づけて導入され、パイロット事業が行われた。その後、他2県に事業を拡大したが、全国的な広がりはみせず、事業は停滞している。そこで、本インターンでは4つのプロトコルのうち心疾患対策の現状について調査をすることが3ヶ月間のミッションとなった。

3) インターンシップの内容

私は、パイロットプロジェクトが行われた県にある3つの施設で、Lao-PENガイドラインに沿った心疾患に対するサービス提供の現状を明らかにするために、調査の準備から実施、データ分析、報告書の作成までを行った。調査の質問項目は、医療施設で提供されているサービスの内容だけでなく、サービス提供の基盤となる人的資源や予算編成等の要素についても包括的に情報が得られるように質問項目を設定した。調査は、保健省のNCDs担当者、県病院の医師、WHOラオス事務所のスタッフと調査チームを組み、5日間の日程で行った。調査結果は記述分析を行って、報告書を作成した。報告書には、調査で得られたデータをもとに、現在のLao-PENプログラムにおいて強化が必要な点、また今後このプログラムがラオス全土に普及していくために必要なアクションプランの提案を詳細に記載した。報告書はラオスの保健省に提出し、3ヶ月間のインターンを終えた。

4) インターンシップで得た学び

本インターンシップを通して、調査計画から実施、報告書作成までの一連の活動に携わることができ、大学院で学んだ公衆衛生に関する知識をどのように現場で形にしていくかを体験的に学ぶことができた。調査計画から調査票の作成においては、WHOラオス事務所のスーパーバイザーの方々にご指導をいただき、サービス提供の状況をアセスメントする際、サービスの内容だけでなく、サービス提供に関わる人的資源や政府の予算編成、また医療統計システムの状況等を組み込むことの必要性について考えることが出来た。その結果、本調査においてLao-PENを継続可能なプログラムに再編成していく上で必要となるデータを収集することができた。また、実際の調査においてはラオスの医療スタッフが持つ強みや、日常生活に根付く薬草療法など、ラオスが持つ豊かな資源についても学ぶことができた。

4. 課外活動について

1) Emory大学看護学校におけるリサーチアシスタント

概要

1年次後期、Emory大学のNeill Hodgson Woodruff School of Nursingでリサーチアシスタントとしてパートタイムの仕事を行なった。仕事内容はデータ入力と看護師が採血や採尿検査を行うために必要な検査キットの準備などであった。研究は本学と医学部との共同

研究で、家庭用洗剤や建物の資材に使用されている化学物質への対象者（妊婦）の暴露、また対象者の社会・経済的状況と生まれてきた子どもの成長発達との関連について明らかにするものであった。本研究は、米国国立衛生研究所（National Institutes of Health）が指揮する大規模研究の一部で、Emory 大学として2年間で約250万ドルの研究費を獲得していた⁴。私は、その環境的暴露因子や対象者の背景、また子どもの発達テストの結果をデータとして入力するのが主要な仕事であった。

インターンシップで得た学び

本研究に対して看護学校は専任の研究者を配置しており、看護学校が担当する調査の管理を任されていた。日本の看護大学に勤務していた際には、このような多額の研究費を用いた共同研究が身近に行われていなかったため、そのような資金を獲得できる程の研究がどのような内容のものなのか、そのプロポーザルの内容や倫理的配慮について知ることができた。また本研究で対象となっていたアフリカンアメリカンの社会・経済的な問題についてもデータを通して学ぶことができた。

2) CDC インターン

概要

2年次後期、2019年1月から卒業までCDCでリサーチアシスタントとしてインターンを行った。Division of Population HealthのSchool Health Branchで、児童／生徒の健康維持・増進のための栄養改善、身体活動促進に関する対策についてのSystematic Reviewを行った。このレビューで得られた結果は、現在CDCが推進している学校保健ガイドラインの評価と改訂に活用される予定であり、約4ヶ月間のインターンで、約400文献からメタ分析に使用する文献をfull-text screeningを行って抽出した。

インターンシップで得た学び

CDCは感染症コントロールで日本でも知られる機関であるが、学校保健や慢性疾患対策など米国内の公衆衛生対策を広く実施している。学校保健では、小児肥満対策を主軸とする慢性疾患管理を行っており、最新の知見を取り入れながらガイドライン改定を行う過程に参加することができ、システマティックレビューの有用性について実践を通して学ぶことができた。また、CDCは政府の下部組織であるため、インターンとして働くためのバックグラウンドチェックに3ヶ月程時間を要し、外国人の就労や情報管理など準政府組織ならではの就労環境や手続きを体験することができた。

5. 修士論文について

1) 概要

修士論文では、2018年夏季にラオスの世界保健機関事務所でインターンを行なった際に、保健施設のNCDs対策の状況を評価するための質問票を作成し、3施設で調査を行なったことについて作成した。以下に概要を記し、実際の修士論文は別途提出する。

2) 背景

本研究の背景は、前述の「3. 臨地実習について」の内容に準ずる。

3) 方法

インターンではインターン期間中の初期に作成したアセスメントツールを 3 施設で実際に使用してパイロット調査を行なった。アセスメントツールは保健施設の NCD 対策と実際の管理について問う質問票と、患者カルテから治療内容の確認を行う調査票の 2 種類を作成した。修士論文ではパイロット調査で得られた結果から、作成したアセスメントツール自体の質について考察し、必要な修正案を明らかにした。また、本調査票を使用する上で最低限必要となる医療システムについて議論を行なった。

4) 結果

以下は、パイロット調査の結果明らかとなった本アセスメントツールの問題点の概要である。

- 保健施設の NCDs 対策について問う質問票：以下、NCDs 質問票>
 - 実際に行われている治療について医療者に問う質問への回答率が悪かった
 - 対象施設の疾患別の患者利用状況に関する質問への回答が得られなかった
- 患者カルテ調査票
 - 外来患者は個別の外来記録がなく、調査票が全く使用できなかった

これらの問題は設問自体に問題があるものと、ラオスの医療システム自体の問題から必要な回答が得られなかったものに原因が大別できた。

まず設問自体に問題があったのは、主に医療者の医療介入についての質問への回答を得ることに問題があった。本調査票は、Lao-PEN ガイドラインに沿って高血圧と糖尿病を早期発見、治療を行うことで心疾患への移行を防ぐための医療介入が行われているかについてのデータを収集することが主要な目的であった。そこで、NCDs 質問票では、高血圧と糖尿病を診断する際の診断基準や、治療薬の選択方法について問う質問を設定していた。

しかし、それらの質問が血圧の正常値を問うものや、使用薬剤の具体的名称を問うものなどであったため、回答者に試験を受けているような感覚を与え、「患者の状態による」といったような曖昧な回答しか得られないものが多くあった。また、回答が得られた場合でもその知識を基に実際に診断を行なっているかは本質問票では問うておらず、患者カルテ調査票から実践の根拠を得ることを予定していたが、患者カルテ調査票が機能しなかったため、適切な診断・治療が実際に行われているかは本調査で明らかにすることはできなかった。

次に、ラオスの医療システム自体の問題から必要な回答が得られなかった問題については大きく 2 点の原因があった。まず、本調査の対象 3 施設全てにおいて外来患者の個人カルテがシステムとしてなかった点である。外来患者の記録はログブックと呼ばれる 1 冊のノートに受診の順に記録がなされていた。よって、患者カルテ調査で得る予定であった対象患者の治療経過についての情報を収集することができなかった。2 点目は、ラオスでは ICD-10 のような診断名の国際基準が採用されておらず、また患者の受診状況を把握するための統計システムの導入途中にあったため、実際の高血圧や糖尿病を罹患している患者の数を正確に把握できない状況であった。

5) 考察

上記のような、アセスメントツール自体、またラオスの医療保健システムの問題により、作成したツールが十分に機能しなかったことを、アセスメントツールの内容と照らし合わせながら考察した。その上で、更にツールの修正案と本ツールが機能する上で最低限必要な医療システムについて考察を行なった。質問票自体に関しては、患者カルテ調査票が機能しないことを考慮して、NCDs 質問票で医療者のサービス実践状況について情報が得られるように、Knowledge, Attitude and Practices (KAP) 調査モデルを参考に質問項目の追加・修正を行う必要があることを検討した。また、医療システムに関しては、NCDs の効果的な管理には患者の治療経過の記録は必須であり、外来患者の個人カルテの導入が必要であることを確認した。また、医療統計システムについては、現在ラオスは WHO の支援により International Classification of Disease-10 (ICD-10) と District Health Information System 2 (DHIS2) の導入・整備を進めているため、その取り組みに対する重要性を NCDs 管理の観点から強調した。

6) 結論

本研究で開発した NCDs アセスメントツールは、NCDs 対策を開始する、または強化する際に必要となる基本的な医療施設のキャパシティを明らかにできることが期待できる。よって考察で検討した修正を行なった上で、ツールの妥当性を再評価し最終版を完成させることで、広く活用できるツールとすることが次のステップである。

6. 本留学を通しての学び

1) 公衆衛生現場における新たな取り組み

私は 2 年間の授業を通して、従来の問題解決アプローチに関する知識を強化したのと同時に、公衆衛生分野における新たなトレンドについても学ぶことができた。特に、絵画や写真等の芸術的なアプローチによる受益者のエンパワーメントを目指した取り組みは、看護師としての専門性の枠を越えた内容で、新鮮であった。例えば、ボディーマッピングを用いた HIV/AIDS 教育では、ワークショップへの参加者が、自身のボディイメージを等身大の画用紙に自由に描く中で、自然と参加者の身体的・精神的な苦痛が絵画に現れるというものである。企画者はその作品から、参加者がどのような支援を必要としているかを知ることができる。また参加者にとっては描く行為、またその作品を用いた参加者との交流を通してヒーリング効果が得られるというものであった。

また、ソーシャルマーケティング手法は、受益者の金銭的な自立を包含したアプローチとして有用であることを学んだ。実際に、アフリカにおける幾つかの事例を通して、女性や経済的に困窮している人々が経済的自立をどのように達成しているかについて学びながら、そのメリットとデメリットについても授業の中で学生や教員と議論をすることができた。

2) 従来の知識蓄積型教育から対象者の参加型教育への移行の重要性

本大学院を振り返った時に、最も影響を受けた授業として自信を持って挙げられるのが、“Community Transformation” という授業である。この授業はブラジルの教育学者で

ある Paulo Freire が提唱している教育観を基盤に置いた参加型授業であった。参加した学生は 5 日間の集中講義の中で実際に教育を受ける側や、教育する側になりながら、Freire の言う学習者の人格を尊重し、学習者が自ら問題に気づき解決していく過程をサポートする方法論について体験的に学んだ。本授業で対象とした問題は、学生の多くが実際に抱えている問題であったため、緊張感を持ちながら熱心に授業に取り組み、大変有意義で濃密な 5 日間となった。私は、community development に興味があるため、将来現場に出た際は、Freire の教育観を体現できるような取り組みを行っていきたくと切に感じた授業であった。

3) 将来のキャリアプランについて

入学時は将来のキャリアプランについて、大枠では考えていたが、本 2 年間を通してかなり具体的なキャリアプランを描くことができた。まず、私が今後対象としたい分野は悪性新生物や心疾患などの慢性疾患で、子どもから大人までの全ライフステージにおける予防や管理について公衆衛生の現場で取り組んでいくことを目標とした。その中で、効果的なプロジェクトデザインとその実施のために、事業評価のスキルとその中で活用する各種の調査手法とデータ分析手法について本大学院で学んだ内容を実際に現場で活用して習得する必要があると考えている。このように、具体的な方向性が確認できたため、まずは実践力を得ることができる現場を探して、現在就職活動を行っている。

4) アメリカの大学院教育について

私は、今後 10 年ほど国際現場で経験を積んだ後に、日本に戻り看護教育に従事したいと考えている。そのため、留学期間中は学生として授業を受けるのと同時に、将来私が看護教育の現場に戻った際、どのように学生により良い学習環境を提供できるかといった視点をもって授業に参加した。そのような中で、まず学生が学びを得られる機会の多様性に日本とアメリカの違いを感じた。例えば、本大学院ではオンライン上でアクセスできるポートフォリオシステムが充実しており、システム上で学生同士が議論する機会を提供したり、クラス外でのグループワークを徹底させるための指導案が充実していたりと、教育の方法が多様であった。またルーブリック評価も徹底されており、ルーブリックが各授業や課題に明確に設定されているため、学生は自身の到達度を確認しながら目的意識を持って授業に参加することができていた。このことから、本留学でアメリカの大学院教育の利点について積極的に学び、今後の日本の看護大学教育を発展に寄与するであろう知見を得ることができた。

5) 人種の多様性について

私は元来、国際保健の現場で働くことを目標としており、諸外国での看護師活動経験もあるため、他国の文化や価値観について尊重する姿勢は磨かれていると感じていた。しかし、アトランタという土地柄もあり、日常生活や学校の授業の中で、度々人種に関する議論がなされる中、日常的にそのような問題を感じている学生と比べて自身の考えの浅さや配慮の無さについて感じる経験を多くした。このように、日本という単一民族国家で育ってきた私のアイデンティティについて考える機会にも恵まれ、学業以外の面においても学びの多い留学となった。

7. 終わりに

改めまして貴財団の奨学金支援により、このような学び多き機会を得ることができましたことに、心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。今後は、自身のキャリアプランを実現すべく努力し、将来的には日本の看護教育現場に戻り、将来を担う看護師の育成に貢献したいと考えております。

参考文献

1 Rollins School of Public Health, Emory University. Community Health Development. Retrieved from

<https://sph.emory.edu/departments/gh/concentrations/community-health/>

2 WHO. (2017). Noncommunicable Diseases Progress Monitor 2017. Retrieved from:

[http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/258940/9789241513029-](http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/258940/9789241513029-eng.pdf;jsessionid=6F531D9EE0A194856F4A737C7E19C038?sequence=1)

[eng.pdf;jsessionid=6F531D9EE0A194856F4A737C7E19C038?sequence=1](http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/258940/9789241513029-eng.pdf;jsessionid=6F531D9EE0A194856F4A737C7E19C038?sequence=1)

3 WHO. (2013). Implementation tools Package of Essential Noncommunicable (PEN) disease interventions for primary health care in low-resource settings.

Retrieved from: <http://apps.who.int/medicinedocs/documents/s22279en/s22279en.pdf>

4 Nell Hodgson Woodruff School of Nursing, Emory University. EMORY SCHOOLS PART OF NIH ENVIRONMENTAL RESEARCH AWARD. Retrieved from

<http://www.nursing.emory.edu/news-and-events/news-release/2016/10/nih-environmental-research-award.html>